

『東湖先生の面目』

宮田正彦

本日は、杉崎さんの当番の予定でありましたが、都合がつかず、私が代役で勤めさせていただきます。杉崎さんのお話を期待されていた方には申し訳ありませんが、しばらく御辛抱のほどお願い致します。

これまでの四回を通して、東湖先生の生涯を辿りながら、その業績や精神についてお話がありました。前回は但野先生から、『弘化甲辰の国難』ということで、東湖先生、罪を得て、苦節十年、そして、その謹慎が解けて再び活躍の時を迎える嘉永六年頃までのお話があったと存じます。

嘉永六年は、次が安政元年であります。東湖先生は、安政二年の大地震で亡くなられるわけでありますから、僅か二・三年の間ではあります。この間、先生は江戸に出られ、烈公をたすけて活躍される。なんとかこの国の大勢を立て直そうという努力の日々が続くのであります。特に、目立った特別の政策を立案実行したということはありませんが、多くの志ある人達が、連日のように東湖先生を訪ねて来ます。東湖先生非常な忙しさでありました。その人々との会見談話を通して、様々な影響を与えていく、そこに、この時機の東湖先生の果たした大きな役割があると思います。それまでは、有志大名やそのお伴の人々、あるいは幕府の役人、学者、といった人々との交流が中心であったようですが、この時機には、身分の低い各藩のいわゆる志士達が入りしております。

東湖先生の伝記は幾つか出ております。茨城大学の鈴木暎一博士が書かれたものは、人物叢書に入っており、但野さんが書かれたものは、「水戸の人物シリーズ9」として水戸史学会から発行されておりますことは皆さん御承知のことと存じます。ここに持って参りましたのは、西村文則さんの『藤田東湖』という著書であります。これらの書物によって東湖先生の交遊関係を探ってみますと、実に多くの重要人物と関係が在ります。当時の主要な人物はことごとく何等かの関係が在ったと言つてよいほどであります。

例えば、これは未だ嘉永以前の例であります。矢部駿河守。この方は、水野越前守に引き立てられた逸材の一人で、江戸町奉行等になった人でありますが、天保十三年に鳥居甲斐守に陥れられまして、終身禁固の刑に処せられ、絶食して自害された方あります。東湖先生はこの人を忍んで幾つかの詩を作っております。

それから、林鶴梁。当時、攘夷派の幕臣で、儒者として有名な方です。先日、ある骨董屋さんが持つて参られました一幅の書は烈公さんの隷書の詩でありましたが、これは林鶴梁に与えられたものでありました。

また、川路聖謨としあきら。この人も幕臣の中の俊秀でありまして、露使ブチャーチンとの交渉に活躍した一人であります。烈公は、この人の求めに応じて一首の和歌を贈っております。これは、荷見さんから歴史館に寄贈された原本が残っております。一寸類を見ない形式のものでしたので御紹介いたしますと、言葉書きが、「御為第一に存じ奉り、聊以て御後闇うしろくらき儀、仕る間敷き事 齊昭」(読み下しにしました)とあり、「君がためまつさき出るむめの花やみこそなけれ我かほりに」は「という和歌が記されてあります。「まつさき」は「先つ咲き」と「真つ先」の掛け言葉でしょう。しかも、料紙が牛王宝印ごおうほういんなのであります。牛王宝印は、中世以降、誓紙として用いられたものでありますから、一見すると烈公が差出した誓紙のように思われますが、実は、川路がこの言葉を書いて欲しいと依頼したものであることは、聖謨の孫の記録によって明らかであり、その聖謨の志を酌んだ烈公が、牛王宝印を色紙に見立てて、裏ではなく表に(誓紙の場合は裏に書く)この文言を書き与えたものと考えられます。これは、天保八年四月のことでありました。烈公と聖謨の互いに深く許し合った間柄が忍ばれますと共に、この間の仲介が東湖先生であったことはいうまでもありません。身分の高い低いに拘らず、志ある人々は、水戸に心を寄せ、水戸もまたこれに応えたのであります。

土佐藩ともかなり深い関係が出来ております。山内容堂公は始め忍堂と号していたようですが、「衆を容るるは人君の徳なり」と東湖先生が揮毫して山内公に呈したので、容堂と改めた、といえます。また、容堂公が、「余の如き者が、如何にして千古の大業を建つべきか」と聞いたのに対して、「尊王の大義を掲げて謀反すべし」と応えた事もあったと伝えております。これはもとより現実の討幕を要請したのではなく、今必要なことは、尊王の下に国民が結集することであり、そのための魁となれば、容堂公の功績は抜群となり歴史に残るであろう、ということでありましょう。

このような関係を見て参りますと、水戸藩は佐幕だったとか、討幕だったとか、いう議論の浅はかさがよく分るとおもいます。水戸学は、一方を悪と規定して対立抗争を事とするような、いわば、二元対立的思考法(例えば階級闘争観)に立つものではありません。今このときに、この国の為に最善を尽くすということが一番大切なことであり、その為に信頼し得る人物と交流を深め、共に励まし合い、志を成そうとしたのであります。情勢が日に非となり、幕府の力ではもはやどうにもなら

なくなつたとき、他ならぬ水戸出身の慶喜公の手によつて、「日本国の為に幕府を葬る」ことになるのであります。

これらは、ほんの一例であつて、東湖先生の人間関係は非常な広がりをもつておりました。島津齊彬公と烈公の關係は有名ですが、幕末の傑物中の傑物である越前の橋本左内や薩摩の西郷隆盛も東湖先生に心酔した人々であります。西郷が東湖先生に会つた日付は、安政元年七月二十九日であるといひます。これは、西郷がようやく江戸に出ることが出来まして、東湖先生を訪問した日であります。西郷が母さんの実家へ送つた手紙がこの西村さんの書物にかいてありますので、ちよつと読んでみます。

「東湖先生もしごく丁寧なることにて、彼の宅へさし越し申候と、清水に浴び候塩梅にて、心中一点の雲霞なく、ただ清浄なる心に相成り、云々」

ここに東湖先生という人物の人柄、その魅力が余すところなく描かれております。実は、田口秀実という人が書き残された『青藍遺事』というものにも、似たような話が伝えられております。どういふ話かと云うと、水戸藩の医師に松延貞雄という人が居りました。この人は大変氣難しい人で、家人は常にその機嫌を損ねないように戦戦恐恐としていたといふような状況であつたのですが、この人が東湖先生を訪問して帰つてくると、二三日は実に穏やかな別人のようになるので、家人は、本人が東湖先生を訪問することを非常に喜んだ、ということが書かれてあります。

これは、まことに偉いことでありまして、先生は誰に対しても親切丁寧であつた。先生の學問に裏付られた誠意と情熱が人を感動させる、先生の心中に一点の曇もないことが明快透徹した判断を可能にするのでありましょう。先生の警咳に接した人は、その明快透徹、しかも自由自在の談論に、自らの迷いを払われ、爽やかな元氣を領ち与えられるのであります。

そのような東湖先生の晩年の實際の談話がどのようなものであつたか。今日は、その一端を薩摩の海江田信義（俊齋）の談話から想像してみたいと思ひまして、資料を用意致しました。

お領ちしましたものは、海江田信義の談話筆記であります。（維新前後）実歴史伝』（続日本史籍協会叢書）の一部分であります。海江田信義は、桜田門の有村次左衛門の実兄であります。維新の後に男爵を授けられております。この筆記は晩年の回想でありますから、そのままではないにしても、その本質、その雰囲氣は十分に伝わる、実に有難い資料であります。読んでみます（註―いま判読の便宜を考慮して、原文には無いルビをふりましたこと、御了承ください）。

「俊齋一日薩邸の記録奉行汾陽かわみなみ彦次郎を叩き、偶々藤田東湖翁の出府あ

るを聞く、翌日私に樺山三円を伴ひ、翁を小石川の水戸邸に問ふ。翁、所労の故を以て謝す。俊斎曰く、実に然るか、明日再び訪はん、明日若し遇ふことを得ずんば、次日を以て復重またかさねて来らん、余は仮令たとい幾日を復かさぬるも、唯先生に接せんことを期望するのみと。将まさに辞し去んとするや、翁、侍者を走らして召還す、二人堂に昇る、少焉しばらくあつて、翁、袴を着け朱鞘の三尺刀（翁の話に、此三尺刀は、余の先子手自ら製錬せし所の遺刀なり、故に余は須臾も之を離さずと、翁の先子は即ち藤田幽谷先生なり）を手にして出て、邀むかふ、状貌雄偉、眼光人を射、風采凜乎として侵すへからざるものあり、一見して天下の偉人たるを知る。俊斎揖拜ゆつぱいして曰く、生等、先生の英名を欽すること久し、而して頃日意窃こころひそかに水府に赴かんことを企図せり、茲こゝに先生の出府あるに遭あひ、今日又警咳に接するを得たり、至幸之に過ぎず。翁曰く、余か所労の故を以て離拒したるハ、其实余の出府八僅に兩日前に在て、未だ登營の礼を果さざるに由れり、然れども子等の熱望する所、敢て黙止もだしし難きを以て、再び招よび返して面接す、而して子等が余を慕ふの切なる、誠に謝するに耐へず、然れとも余の心中に於て、何ぞ慚靦する所なからんや、（先生は一端面会を断るのですが、その熱意を酌んで面会することになりま

す。）俊斎曰く、方今天下の形勢たる、外患内憂並ひ至れり、宜く武威を振起して、一朝緩急あらハ、一死以て国に殉すへし、生等か久しく先生を欽慕する所以のもの、専ら今日の実際に方りて、先生の明教を仰んと欲するに在るのみ、請ふ垂誨を吝あしむ勿れ、翁曰く、余は素より文もなく武もなく、唯顔色黒くして眼大なるのみ、仮令余の指誨を受くるも、恐くは終に益なからん、然れとも余は只一片の丹心あり、常に邦家の隆替を慮り、方今士氣の沮喪せるを歎せり、子等の志も亦余と感を同ふするものあり、子等の余に於ける、年に老少ありと雖も、意氣相投するに於ては、只宜く好誼を厚ふし、以て互に天地正大の氣を養はんのみと。」

年齢に拘らず、「お互いに天地の正氣を養はんのみ」。良い言葉ですね。先生の基本的な態度はこれに尽きる。

「翁又談柄を一転して曰く、我藩曩さきに罪を幕府に獲て、景山公は禁錮に処せられ、余と及び戸田銀次郎（忠大夫とも云）も、亦獄に繋かれ或は禁錮せられ、前後既に九年の星霜を消了せり、其状宛あたかも達磨を学へるものゝ如しと、」

これは、但野先生の講義にありました弘化甲辰の難を言っております。

「言ひ訖あわりて微笑し、更に語を繼て曰く、這回米船の吾国に渡来するに方あた

り、余は卒にわかに幕府の召喚する所と為り、纒わづかに白日を觀るに至れり、然り而して今我皇国の情態を察するに、六十余州士氣の萎靡せる、今日より太甚はなはだしきはなし、曩なに八僅々二隻の軍艦を怖れ、却て醜虜の輕侮を受け、曾て一人の義士もなく、又一人の勇者もなく、恬てんとして国辱を顧みず、之を是れ我神州の人士、尚ほ正氣を存すと謂ふへき乎、余は浩歎に耐へざるなり、苟も他の輕侮に遇ふて、而して国を開かんよりは、国民拳て死するに如かず、抑そもそも彼に輕侮せられて、此国を開くか如きは、一国の正氣、是時を以て断滅し去れるなり、何そ久しく国を保つを得んや、例へは我れ初て子に面するに方りて、先つ子の面に唾して、今より子と交らんと謂はゞ、子若し白痴に非すんは、必ず怒て我を殺さん、其れ然り、然れ八則国と国との交通を開くも、亦まさに此情理なかるへからず、然るを前日浦賀に於ける一事の如きは、愚と謂八ん乎、怯と謂八ん乎、我神聖なる国威をして、一朝にして落沈せしむといふも亦可なり、嗚乎、彼の浦賀の一事に際し、余をして事局に当らしめさりしは、本邦の国運茲こゝに窮まれるを知るに足るなり。俊齋曰く、高論敬服に勝へず、然れとも先生にして若し浦賀の事に当らは、果して若何いかがか処辨せしや、敢て先生の智略を聞かん。」

なんとも愉快な言葉です。大言壮語とも聞こえましようが、憂いを同じくする初対面の青年に対して、実に率直に外交の基本、国家の根本を喝破してみせます。このように言われれば、誰しも膝を乗り出して、では、如何なされようというのですか、と聞きたくなります。その方策とは何か。

「翁曰く、善よかな問へること、対談の席上、ペルリの首級は、必ず余の白刃一閃の下に落たらんのみ、果して然らんには、余も亦当日まさに死すべし、然れとも彼のペルリを斫きりて、而して又自から死するもの、是れ余か一片の正氣なり、是に於て乎、余は已すでに死して跡なしと雖も、此一片の正氣たる、横に全国に充滿し、豎たてに百歳に伝遺するや必せり、而して正氣の磅礴する所、蓋けだし国をして富ましめ、兵をして強からしむるの大本たり、国苟も富み兵苟いやくも強し、外患何そ恐るゝに足んや、余は当日の事を憶おもふ毎に、自から歎惜に耐えさるのみと。(中略)」

これが東湖先生の応えであります。国家にとつても個人にとつても、大切なのは正氣を横溢せしむること、正氣は、独立自尊、富国強兵の根本であります。

次の一文は、正氣を真に発揚させる為には、真剣にして具体的な学問が必要である、という教えであります。兎角、若いものは、時勢に触発されて目先の行動に酔いがちであります。なにかやっている、ということ自分で自己満足に陥る者が多い。し

かもそれをあたかも絶対の正義として他人に強制したりする。何時の時代でも同じであります。しかし、それは本当にこの国の未来を正しく開いていくものでありましようか。その判断はどこから出てくるのか。それは、生きた深い学問、先哲に学び、歴史に鑑みたものでなければなりません。そのことを先生は諄々として諭されるのであります。おそらくは、信義の中に、血氣の勇を見たからでありましょう。

「尔後、俊齋、日日翁を訪ふ、一日俊齋曰く、方今志士の世に処するや、書を読み文を学ぶの日に非ず、只死を以て国に報すへきのみ、願くは先生の教引を煩八さんと。翁曰く、子は読書を以て度外に措く乎、果して然らば、子八何に依てか、事物の盤錯を処せんとするや。俊齋曰く、事理の正邪黑白を判知するは、自家の精神に問ふて可なり、何そ必ずしも読書の力を要せんや。翁晒わて曰く、子は前日以来、既に自から屢々しばしば君子を求めんことを言へり、

敢て問ふ子は果して君子を好むや。（ここでいう君子は、志が在つて自己を確立している人物、共に大事を語るに足る人物ということでしょう。）俊齋曰く、固より君子を好む。翁曰く、果して君子を好まば、子は既に 王朝の祖宗に親謁せしや、又和漢の古聖先賢に面見せしや、夫れ 王朝の祖宗は、元より君子たり、又彼の武内宿禰の如き、鎌足公の如き、和氣氏（清麻呂であります）の如き、楠公・重盛及び藤房等の如き、乃至なほ東照宮の如き、三代將軍若もしくは八代將軍の如き、或は中江藤樹・伊藤仁齋・熊沢了介等の如き者、是等八皆本朝の君子者にして、最も其著名なる者なり、漢土に在て八、堯・舜・禹・文・武・周公・孔子より、以て顔回・孟子・子思・程・朱（程は、程明道・程伊川。宋学の創始者。朱は朱熹）の徒に至り、蕭何・張良・孔明・文天祥・王陽明等の如き者、亦皆君子者に非ざるはなし、自余和漢に亘わたりて、幾多の賢豪ありと雖も、枚挙に遑いとまあらざるなり、敢て問ふ、子は既に

斯の如き等の聖賢君子に親接せし乎。俊齋曰く、奇なる哉先生の言、先生の臚列する所、皆既に過去の人のみ、如何そ之に親接するを得へけんや。翁又晒て曰く、然り、皆既に過去に属せり、故を以て余八倍々ますます子か読書を度外視するを恠あやしむなり、子試みに眼を放て現時の人物を察せよ、君子に類似せる者は、或は全く無しとせざるも、眞の聖賢君子なるものは、断として之れあるなきを知るならん、然れとも前段既に列挙せし所の君子者は、常に書中に在て存せり、是を以て其人既に過去に属すと雖も、之を書中に求むるときは、

歴々然として現に茲ここに存せり、安いずくそ親接するを得すとせんや、然るに子は一方に在ては、君子を好むと謂ふと雖も、又一方に在ては、書を読まずといふ、両言背反し、自家撞着すといふへし、之を以て之を推すときは、子が君

子を好むといふもの、豈妄語に非ざるを得んや、因て又問ふ、子は既に和漢古今の事体に通曉するや。俊齋曰く、未だし。翁曰く、恐くは然らん、苟も君子に親接せず、苟も和漢古今の事体に通せずん八、仮令一死を以て国に殉せんと欲するの誠心あるも、盤根錯節に臨むときは、或は正邪を誤占することなきを保せず、何となれ八則ち容易に果断を施すへからされはなり、好し之を施すとも、或は妄断に失し易ければなり、是故に常に古聖先賢と共に道を講し、広く和漢の事体に通し、古に稽^{かんが}へ今に徴して、以て決断を下すときは、百断百中、毫^{すこし}も過つ所なし、例へは吾人が一朝緩急あるに方^{あたり}りて、命を授け国に報せんと欲するものは、本邦の責ふべきを知らはなり、本邦の責ふべき所以のもの、一に 皇統連綿たる天然の帝国にして、人造に出たるに非されはなり、若し夫れ斯の如きの事理を辨了せず、妄りに時勢に激昂して、身を抛つか如き八、畢竟暴虎馮河の徒たるに過ぎず、是れ此事理を詳知して、其国に報する者、斯れ之を真正の志士とするなり、然れば則ち書を読まずんは、君子を求めて君子を獲す、果断反て妄断に失し、死すとも遂に無益に属せん、是故に苟も志士を以て自から任する者、宜く努力^とめて読書に従事すべきなり、且つ夫れ苟も読書に志ある者八、須く天下の書典を読了せんことを思ふへし、然れとも是れ到底凡人の為し得る所に非ず、然り而して己れの好まざる所を闇^{おき}て、其好む所を修むるか如き八、蓋し読書の本旨に非ず、之を要するに、須く和漢洋古今に亘り、好悪両^{ふたつ}ながら研究して、以て適宜に取捨すべきなり、彼の学生某なる者八、子と同藩の士なり、年尚少^{わか}ふして能く書を読むと雖も、只一個の才子たるに過ぎず、子、今より書を読むも、必ずや彼か如き読書家と為る勿れ、又余か友人杉山千太郎の子に、國之介なる者あり、恰も子と同く只腕力を主として、曾て書を読むことを為さず、然して其精神に於ては、純白無雜にして、甚だ愛するに足る、然れとも書を読まざるを以て、未だ君子に値遇する能はず、又事に臨んで妄断に陥るなき能はず、此の如きは未だ共に国事を論するに足らざるなり、子願はくは罪勉^{へんべん}して復書を読まずと謂ふこと勿れと。此時翁微笑して曰く、嗟吁、彼のペルリか来り侵す所以の者、盖し読書を度外視すること俊齋其人の如きもの、尚ほ日本に多々なるを以ての故なり、斯の如き等の人、一たび日本の地を払は、仮令千百のペルリ来るも、亦何そ畏るゝに足んやと。俊齋曰く、敬服、謹て先生の督誨に之れ従はんと。

(中略)

説き来たり説き去つてまことに親切であります。いやしくも何事かを世の為人の為に成さんと志す者は、この部分を再読三思すべきであります。学問というもの、

現在ではただ知識をこれ求めるをもって学問と考え、博識をもって学者と称する。

間違いであります。盤根錯節に臨んでこれを一刀のもとに裁断し得るものが、眞の学問の力なのであります。また、「本邦の貴ふべき所以のもの、一に 皇統連綿たる天然の帝国にして、人造に出たるに非されはなり、若し夫れ斯の如きの事理を辨了せず、妄りに時勢に激昂して、身を抛つか如き八、畢竟暴虎馮河の徒たるに過ぎず、是れ此事理を詳知して、其国に報する者、斯れ之を眞正の志士とするなり、」の一句、水戸の眼目であります。それにしても、「天然の帝国」という言葉は、東湖先生の言葉そのものかどうかは不明ですが、我が国柄を一言で言い尽くしております。また、終りの数行も翫味すべき文章です。

次は、東湖先生の秘策ともいふべきもの、天皇の下に君民一体の国民国家を創設しなければならぬとする大議論であります。

「翁又一日俊齋に謂て曰く、今日八国家の大計上、最要最密の大事を談せんと欲す、然れとも余か胸中に於て、信じて疑はざるの人に非ずん八、未だ曾て容易^{たやす}く之を人に洩さず、蓋し是の論にして、万一にも幕吏の耳朵に触れな

は、余は生命を保つへからざるのみならず、大事一朝にして去らんのみ、是れ秘密を要する所以なり、而して子の如きは、年尚ほ少^{わか}しと雖も、其精神に於て深く信する所あるを以て、茲に之を談せんと欲す、若し無実の徒（文字どおり眞実の無い人、才子あるいは策士）をして、苟も之を知らしめは、忽ち不測の大患を惹起せん、請ふ子之を深蔵して、漫^{みだ}りに他人に告る勿れ、夫れ方今本邦の形勢を観るに、幕府は徒^{いたずら}に奢侈に耽り、諸侯も亦各々虚威を貪り、彼の米船の渡来するに方て八、人皆錯愕狼狽して、曾かつて之に当るの方針を知らず、非常の国辱をペルリに受け、恬^{てん}として之を顧みざるものゝ如く、又今後の方策をも講せず、若し斯の如くにして日月を消了し去らば、本邦の運命果して幾年をか保たん、盖^{けだ}し亡国の機、応に遠きに在らざるへし、惟^{おも}ふに今よりの後、吾国に侵来するもの、特^{ひと}り米国のみ止まら

ず、自余の各国、続々として競ひ至らん、是に於て乎勢の趨く所、必ずや国と国との談判を啓^{ひら}かざるへからず、是を以て余深く吾邦の爲めに計るに、將軍独り国権を擅^{ほしい}まゝにし、天子をして虚器を擁せしむるは、必竟邦国を保つ^{まも}るの道に非ざるを知る、必ず一君万民の大義を明かにし、以て天子をして普天の下率土の濱に君臨せしめずんは、邦家の大事是より去んのみ、然り而して彼の諸外国に対して、異日一たび談判を開くに至らば、勢^{いきおい}自から天子君臨の実を要するに至らざるを得ず、何となれば則ち素^{もと}より国と国との対談なるを以て、彼の諸外国は、我に逼^{せま}るに日本皇帝の意を承^うけんことを以てす

へし、果して此に及八、之に答ふるに日本皇帝八只虚位に属するを以てすへき乎、国辱焉これより大なるはなし、是故に余八私ひそかに以為おもへらく、天子の親みずから世に臨み給ふの機ときは、期せずして遂に至らんと、然れとも是れ外国の逼迫に遇ふて、始て天子の親政を觀るに過ぎず、果して斯の如くんは、宛あたかも外国の侮辱に逢ひ、始めて国を開くと一般にして、神州の正氣八是時を以て滅却するや必せり、且つ夫れ独り這般しやはんの事理あるのみならず、抑もも天子にして空く虚位を擁し、苟も統御の実なくんば、全国人心の凝結一致、素より望むへからず、天子一たひ親から天下に君臨し給ひ、將軍家を使用すること、手の指に於るか如く、將軍家の天子に於る、宛も子の父に事つかうるか如くならしめは、大義明かに立ち、人心茲に凝一して、国力是より振作せん、嗚呼今日の大計、此一事を挙るより緊急なる八なし、唯其れ然り、然りと雖も此大事を挙げんには、之か主動者たるの一大賢豪を要もとめさるへからず、因て惟おもふに各藩多士の中、未た必ずしも一二の名士なきに非すとすらも、彼の藩主たるもの、多く八姑息苟安して、天下の大勢に通せず、而して伯樂の監識なし、千里の名馬ありと雖も、驥足を伸るに由なきなり、然るに子か藩主齊彬公の如き八、余夙に天然の明主たるを知れり、公を推して王政恢復の主動者と為し、藩臣奮て之を輔弼ほひつしし、君臣一体以て王室を佐たすくるときは、天下の諸侯率しきひすして勤王の大義に随ふこと、手を翻すか如くならん、是れ余か夙夜に熟図する所にして、今日此長策を採らすんは、復また他法あることなしと信する所なり、而して水戸若くは尾張の如きものありと雖も、未た以て此大計に率先するの国力を有せず、故を以て余は特に望を齊彬公に属するなり、（以下、東湖薩摩の人材を問ひ、俊齋、西郷、大久保を挙げる。今省略）

明治維新は、まさにこの精神によって成つたのであります。

次の一文は、東湖先生の臨機応変の教育姿勢を伺わせるものであります。

「俊齋一日原田兵助翁を叩く、翁は水府三田の一として、両田に滅せさるの人傑なり。翁の話に曰く、我景山公、曾て「鳥追」を郊外に施行す、蓋し鳥追なる者は、士卒を部署して軍隊を作り、軍旗を翻して、諸鳥を捕獲す、其状宛も出戦に象かたどれるなり。公、騎して城門を出て、遽にわかに鞭を加へて馳す、諸士従ふ能はず、只藤田及小姓某のみ、馬の鞍紐に附縋して、前顛後倒以て纏わすかに随ひ得たり、公、中途にして樹陰に憩いこひ、霎時にして復また馬を馳せ、既にして郊外に出つ。公曰く、乃公たいこう（自分のことをいいます）先の樹陰に煙具を遺失せりと、小姓某直ちに往て拾ひ来んことを上申し、將に馳せ去ら

んとす。藤田眼を睜いからし声を励まして叱して曰く、汝知らずや今既に敵国の境に在ることを、而して衆兵路に後れて未だ到らず、主君に随ふ者八、只余と汝と二人のみ、主君の危急旦夕に在り、汝君側を辞して煙具を索もとめんとす、煙具果して何為なにするものそと。某乃すなはち止み、稍ようやくにして衆皆到れり。」

これは、追鳥狩における一挿話であります。時処位ということをお教えしております。小姓は主君の日常の世話をする係でありますから、この小姓の行動は日常に於てはまさにそう在るべきでありましょう。しかし、追鳥狩は軍事演習です。一端武装して出れば、たとえ仮想とはいえ、そこは戦場であります。行動の原理は「道」と呼ばれますが、道は一筋ではあつても、その在りようは時処位によつて千変万化します。杓子定規ではなく、まさに盤根錯雑に対処して誤らないこと、それが本当の学問であります。

「又一日俊斎、翁（原田兵助）を訪ひ、藤田翁の劔槍の巧拙を問ふ、翁曰く、藤田の劔槍たるや、極めて拙なり、然れとも一たひ他と相試むるに方あたりては、水府の人士中、曾て一人の其前に立ち得る者なし、亦妙なりといふへし、盖し平生の正氣、発して人を襲ひ、猛烈勇壯、当るへからざる者あるなりと。」

これも大変面白い一文であります。実際にこのようなことがあつたのでありましょう。勿論、気合いだけで勝つというわけではないでしょうが。

そろそろ時間がなくなつてまいりました。ただ今読みました文章、あるいは、これまでの各講師の話などによつて、東湖先生の人柄、その面目というものの一端はお伝えできたかと思ひます。海江田信義はその他にもまだまだ面白い話を残してくれましたが、それは皆さん追々お読みください。始めの方に東湖先生自らの言葉として、自分は目玉が大きくて色が黒いだけだ、学問も足らず、識見も乏しく、人に教えるようなものは何も無い、と言つています。しかし、しかし自分には一片の丹心がある。これは誰にも負けない。これは長年にわたつて天地正大の氣によつて養いきたつたものである。これを世に掲げること、これが東湖先生の面目であり、それが先生を日本の東湖先生にし、歴史を動かす力となつた。先生の歌に、

いたづらに身をば嘆かじともしびの

燃ゆるおもひを世にかかげばや

という一首があります。

今の世の中、非常に難しい。しかし、自ら先哲の道を学び、且つ世界的情勢、我が国の有様を深く観察しながら、死すべき時に笑つて死ねるように学問を深めて行

くならば、一人一人の正気、必ずや寄り集まって大きな力となるものであらうと思
います。この水戸学講座も、そのような意味で、僅かであっても、皆様の勉強のお
役にたつのであればと継続しているものでありますし、我々もまた、講師という名
前で高いところから偉そうなことを言ってはおりますものの、この様な機会を与え
られることによって、更にいろいろと勉強させて頂くという恩恵を受けているので
あります。お互いに、東湖先生の言われるように、心を一つにして学び合う、その
一つの機会としてこの講座が、皆様のお役にたっておりますならば、私共の大きな
喜びであります。つたない話で恐縮でありましたが、これをもって本年の講座を終
了致します。有難う御座いました。

(以下は、当日配付した資料の内、時間の関係で読まなかったもの。参考までに付
載しておきます)

「一日、西郷・津田山三郎(肥後)・鮫島庄助(薩摩)と共に藤田翁を訪ふ、
翁談論の序次、三士の気稟を評して曰く、西郷子は勇者の資あり、津田子は仁
者の資あり、而して鮫島子八智者の資あり、而して余は孰いづれに属せんか、
敢て三子の評を買はんと。鮫島卒尔そつじとして答て曰く、先生の人為ひととなり
や、智仁勇を兼具せりと。翁儼然乎として叱して曰く、嗚呼、子の余に於る
や、交日まじわり猶浅し、而して子八何に由てか余の三徳を兼ねるを知認せし
や、余の未だ三徳を具へざるは、余の精神自みから既に之を識れり、曷な為なにす
れそ子の評語を博して、自から妄信すへけんや、余か子等を評するに、智仁勇
を以てすれば、直ちに採て余に三徳を属するか如き、是即ち余か子を評して、
智者の資ありと称する所以なり、然れとも斯の如き八、即ち真正の智に非ず、
所謂智術に属するものなり、夫れ真の智者なるもの八、智を以て主とすと雖
も、未だ須臾しほらくも仁と勇とを離れず、智中常に仁勇を有せり、苟も仁と勇
とを離るの智ならば、決して真智に非ざるなり、仁と勇とに至ても、亦復またま
然り、仁にして智勇を離れ、勇にして仁智を離れ、仁中に智勇なく、勇中に
智仁なきか如きは、真正の仁と勇とに非ざるなり、是を以て智にして苟も仁勇
を離るときは、智者は変して邪智狡獪の徒に陥り、仁にして苟も智勇を離る
るときは、仁者は変して因循姑息の徒となり、勇にして苟も智仁を離るとき
八、勇者は化して匹夫の勇と為り、俗に所謂短気短慮に失するの暴徒と為るな
り、豈深く戒慎せざるへけんやと。三士皆敬服せりとぞ。」

「(齊彬公の)世子虎壽丸君、六歳にして夭折す、是時藤田翁、景山公(烈

公)の使者として、来りて弔詞を齊彬公に伝ふ、公曰く、天命なり、如何とすへからず、但黄門公の弔意を謝し、併せて卿か遠来の労を謝すと。而して翁を中山次郎衛門(虎壽丸君の抱守役)の家に延ひき酒饌を供す。翁一箸をも下さす。中山異あやしみ問て曰く、先生疾あるか。翁曰く否と、而して筆硯を呼び、国詩を書して中山に與ふ、曰く、

つかへにし君八はかなくなりぬとも忠まめてふ道の二筋もある

中山一吟して之を納めしといふ。異日、翁、俊斎に語て曰く、余曩なまに幼君を弔問するの日、中山の家に在て、酒饌の厚遇を辱なふせしも、当日齊彬公の中情如何を察し、公の哀悼を推想して、美酒珍饌も喉に下すに堪へず、思はずも一吟を得て、中山に示し、因て自から以おもへらく、中山おまに余の国詩に因ちなみて、忠孝節義の談に及ふへしと。何そ料はからん渠かれ徒いたづらに一吟せしに止りて、談柄終つひに此に至らざらんとは。余惟おもふに彼の中山なるものは、恐くは鼠色の人物ならんかと。盖けだし鼠色は黒白未分の色に属するを以て、其人物の忠姦未定なるを評するなり。」

(平成十年十二月六日講座)

(茨城コンピュータ専門学校副校長)